

『後撰集新抄』翻刻（二）

日向一雅

A Transcription of *Gosenshū Shinshō* (II)

Gosenshū Shinshō, published in 1814, is a representative commentary on the *Gosen Waka Shū*. It was once reprinted between 1910 and 1912 by the Kasho Kankōkai but has since become a rare book. According to the General Bibliographical Index there are only ten complete sets in existence. Although unlisted in the Index, the library at Seishin Joshi Daigaku is in possession of all 15 volumes of the set. In vols. 64 and 66 of *Seishin Studies* I presented a transcript of the "Bekki" volume and volumes I and II. For this issue I have transcribed volume III.

凡例

- 一 底本は聖心女子大学図書館蔵『後撰集新抄』(全十四冊、『別記』一冊)、文化十一年版本である。
- 一 旧字体、略体、異体の漢字は当用漢字または通用の字体に改めた場合がある。譯↓訳、哥↓歌、畧↓略など。
- 一 仮名遣い、送り仮名、濁点はすべて底本のままである。
- 一 底本では句読点はすべて・であるが、適宜、や。に改めた。また若干私に削除したり施したりしたところがある。
- 一 底本の傍線——は——に直した。傍線は大抵右に付けてあるが、たまに左に付けることもある。それは底本のままである。その他引用歌の冒頭に付される「は、普通の「に直した。傍点の、や。を付すのは底本のままである。
- 一 底本の割書き部分の振り仮名は当該漢字の下に()として記した。
- 一 底本では、欄外に宜長の後撰集詞のつかね緒を引用したり、美石の注記を掲げたりしているが、それらは当該個所の適当な所に※を付して、一字下げて記した。割書きの形式であるのは底本のままである。
- 一 底本の頁数は表裏を区別しないので、本文の右傍に(一オ)(一ウ)のように記した。但、割書き部分で頁が変る時は傍書できないので、割書き本文の中にくり入れて(二オ)というように記した。
- 一 なお本号より通しの歌番号を付した。
- 一 また誤植が明らかな場合も底本のままとし、右傍にママと記した。

後撰集新抄巻下 三(外題)

後撰和歌集第三新抄

春歌下

贈太政大臣相わかれて後、ある所にて其こゑを聞て遣しける

藤原顯忠朝臣母

○作者顯忠ノ朝臣ノ母は、源ノ湛ノ女なり。贈太政大臣は、本院の時平ノ公にて、顯忠ノ朝臣の父なり。

二 鶯のなくなる声はむかしにて我身ひとつのあらずもあるかな

○時平ノ公の声を鶯になぞらへて、其こゑは昔すみ給ひたるをりにかはらねど、今は絶果給ひぬれば、わが身ばかりは、もとのやうにもなき事かなとなり。榮花物語日藤兼光著 五條殿女御「かすむめる空のけしきはそれながら我身ひとつのあらずもあるかな、新古今上維「昔見し春はむかしの春ながら我身ひとつのあらずもあるかな、皆我身のみかはり果たるよしなり。又、古今五忠「月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にしてといふは、此、あらずもあるかなもとのやうにもといふをふくめたるなれば、よめる意はみなおなじ。

桜の花のかめにさせりけるが散けるを見て、中務に遣しける

○古へは、花を瓶にさすに、近世の俗に生花など云さまにさしたるにはあらず。大なる小きも、

いさゝか枝づくろひなどは折たる枝のまゝにさせるなり。古今上に、染殿の后のおまへに、花がめに桜の花

をさゝせ給へるを見てよめる、とある詞書、また枕草子に、おもしろく咲たる桜を長くをりて、大なる花瓶にさしたるこそをかしけれ」、また、高欄のもとに、青き瓶の大なるすゑて、桜のいみじ

う面白き枝の五尺はかりなるを、いと多くさしたれば云々などあるにて、其さまをおもふべし。

三

貫之

ひさしかれあだにちるなと桜花かめにさせれどうつるひにけり

○瓶かみを亀かみにそへて、久しくあれとて、亀といふ名の瓶びんにさしたれど、其かひもなく散たるよとなり。うつろふといふも、即ち散る事にて、詞をかへたるなり。此七首下に、「風をだに待てぞ花のちりなまし心づからにうつろふがうさとあるも同じ。

返し

中務ニモ

三

千代ふべきかめにさせれどさくらばなとまらむ事は常にやはあらぬ

○千年を経べき名の瓶びんにさし給へばとて、花は長くはとまらず、散果さんぐるが、花のさだまりにては侍らずやといひて、さればこそ其花も散侍つらめといふをふくめたるなり。此歌、貫之家集には、「千代ふべきかめなる花はさしながらとまらぬことは常にやはあらぬと有り。此所の下ノ句、「とまらむとあるは、ことわり聞えず。こはきはめてとまらぬの写誤なり。契沖法師も師翁もしかいはれたり。

題しらす

よみ人しらす

四

散ぬべき花のかぎりはおしなべていづれともなくをしき春かな

○花といふ花のかぎり、ことごとくちりぬべき花なれば、春咲く花はいづれともなく、皆悉くをしき事かなといふ意なりと、師翁いはれたり。二二

朝忠朝臣の家の一本
朝光朝臣、となりに侍けるに、さくらのいたう散ければ、いひつかはしける

全

垣ごしに散くる花を見るよりはねごめに風のふきもこさなむ
見ればかひなし桜花
 は六帖

伊勢

○見るよりはは、かく見てゐんよりはといはんが如し。今見て居ていふ詞なれば、見よりはと見ると見るよりはといへるなり。根ごめは、上中春に、「香ごめにさそふ風のこぬまにとあるに同じく、根共キトキにといふことなり。此歌、家集には土御門の中納言の家の、隣にすむころ、其家の花のちるを見ていひやる、「垣ごしに見れどもあかぬ梅のはなねながら風のふきもこさなん、かへし、「梅の花うゑて我のみ見んとかはとなりあるきも人やするととあり。さて此歌、根ごめに風の云々といへるに、あるじ朝光共朝臣にといふ意をふくめたるならんか。早蕨巻宇治の中ノ君の京二家院はうつる給はる事、兼ノ君のあつかひ給ふをりの歌に、「袖ふれし梅はかはらぬにほひにてねごめうつるふ宿やことなるとある袖ふれし梅とは、中ノ君の事をさしてのたまへるなどに、よく似たればなり。なほ根ごめといふ詞は、中務集書詞に、みじかききゝやうを、ねごめ引て、女三ノ宮より云々なども見えたり。

女につかはしける

よみ人しらず

六

春の日の長き思ひは忘れじを人の心にあきやたつらん

○恋歌なり。春の日の如く、ゆたかに長き心ざしなる我は、いつまでも忘るゝ事はあらじを、そなたの心にはもはや秋がたちて、我を厭きらたるにてやあらんとなり。(三七)

だいしらず

七

よそにても花見るごとに音をぞなく我身にうとき春のつらさに

六

○季吟法印の抄に、人にふるされたる人の歌なるべしとある、然るべし。一首の意は、春はあだなる花のさく時なれば、花を見るごとに、あだなる人の事を思ひ出して、音になかるゝといふなるべし。我身に疎くする人はあだなる人なり。それを春のあだなるにかこつけて、春のつらきといひなしたるなるべし。又思ふに、此巻の末に、やよひにうるふ月ある年、つかさめしころ、申文にそへて、左大臣の家につかはしける、貫之とあるが如く、春の司召にもれて、毎春なげく心にて、我身にうとき春といへるにてもあらんか。その心の歌、集中に多し。^(四五)

つらゆき

風をだに待てぞ花の散なまし心づからにうつるふがうさ

○花の散るならば、せめて風を待てなりともちるべき事ぞ。風をも待たずして、花の心からちる事のうさよとなり。古今^下に、「春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつるふと見んとあるとは、表裏^{ウラハ}なるいひ方なり。

^{上ノ句のてにをは、玉緒巻六に、此歌、また古今一「見る人もなき山里の桜花はかの散なん後ぞさかましなどいふを出されて云、此まじは皆上にぞもじをおけり。つねのまじながら、いさゝか意かはりて、一つの格なり。「かやうにこそあるべき事なれと云意にて、さやうにあらせまほしく願ふこゝろあるなり。古今の歌にていはゞ、外のちりなん後にさかまほしく思ふ意なり。いづれも皆これにならずらへて心得べしとあり。猶また遠顧をもひらき見て、たしかにこゝろあべし。}

あれたる所にすみ侍ける女、つれづれにおもほえ侍ければ、庭にある^{スミレ}重の花をつみて、^{人の許に}〇いひつかはし^{つかね緒}ける^(四七)

※人の許に、或は男のもとになどいふ事なくては、事たらずしだけなし。此例集中の詞書にいと多し。皆詞を加ふべしと、つかね緒に見えたり。

よみ人しらず

六

我宿にすみれの花の多かればきやどる人やあるとまつかな

○万葉八「春の野にすみれつみにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜寝にけるなどいふ事もあれば、かく我宿に重かさの花の多くあれば、もし来宿る人もやあるとまつ事かなとなり。すみれに、男の通ひすむ意をもふくめたるなるべし。きやどるは、来宿るなり。下三に、「白雲の来やどる岑の小松原枝しげれや日の光見ぬともあり。

題不知

七

山高み霞をわけてちる花を雪とやよその人は見るらん

○一首の意は明らかなり。山高みは、山が高さになり。よそとは遠く離れたる方をいへり。恋歌などに、よそになる、よそに見るなどいふも、みな遠くかけ離れたる意なり。

八

ふく風のさそふ物とはしりながら散ぬるはなのしひて恋しき

○花をば風のさそふべき物ぞとはしりつゝ、なほ散たる花が、あながちに恋しき事よとなり。しひては強シヒテなり。俗言に無理ムリにといふも近し。

九

うちはへて春はさばかりのどけきを花の心やなにいそぐらむ

清原ノふかやふ

○うちはへは、打延ウチノベにて、春は物毎モノゴトのびくくと、ゆるやかにのどけきものを、花の心にはいかでいそがは

しげに散るらんとなり。古今下「ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらん。

つねにせうそこつかはしける女ともだちの許より、桜の花の（五ウ）いとおもしろかりけるえだをよりて、これ
その花に見くらべよとありければ

こわかぎみ惟高ノ親王
の女なり

三

我宿のなげきは春もしらなくに何にか花をくらべても見む

父のみこの心ざせるやうにもあらで、つねにもの思ひける人にてなんありける。

○我宿は常になげきのみしげく、その敷ナカといふ木は、もとより花のさくやうなる事はなく、春ぞもしらぬに、此桜の花をば何にかくらべても見侍らん、くらぶべき物はなしとなり。春もしらぬといふに、鬱々ウツツとしてくらす意をふくめたり。父惟高ノみこの、よきやうにとおもほしおきて給ひし如くもあらざればなり。故に左註をば加へたるなり。伊勢集に、となりなる人の、そこに見くらべよとて、花（六ウ）おこせたるに、
「春にだに忘れにける宿なれば色くらぶべき花だにもなしとあるをも、引合せて見るべし。

春の池のほとりにて

よみ人不知

○春のとある、文字は、誤て後に入たるなるべし。こは、春、池のほとりにて」とあるべきなり。かゝるふりの詞書は、春」とよみきりて、池の云々とつよく例なればなり。

春の日のかけそふ池の鏡には柳のまゆぞまづは見えける

○池水を鏡になぞらへて、さて人の鏡に向ひて面をうつせるが如く、いひなしたるなり。春の日のかけそ

ふといふに、池の鏡のいよ／＼澄まざる意もあらんか。柳の眉は、万葉十九歌に、「春柳の、細き眉ねを、あみまがり云々、又長恨歌に、芙蓉へ如く面ノ柳へ如く眉ノなど猶多かり。」

春の暮に、かれこれ花をしみける所にて

望

かくながらちらで世をやはつくしてぬ花のときはもありと見るべく

○花の常磐なるもありけるよと見るやうに、かく盛のまゝにて、世のあらんかぎりあればよろしきを、何とてかく盛ながら世をば尽さぬことぞ、かくながら世を尽せよかしといふ意なり。此歌三ノ句、てぬのては、てきてしてよてんなどのてと同一く、つゝの転用にて、此歌の上ノ句は、古今「桜花春くはゝれる年だにも人の心にあかれやはせぬ」といへる歌の下ノ句と同じ格のてにをはなりと、玉緒に見えたり。猶委くは玉緒四ノ巻十二葉、五の巻廿二葉、六の巻五葉などをひらき見て心得べし。

延喜ノ御時、殿上のをのこどもの中にめしあげられて、おの／＼かざしさしける次に、

凡河内躬恒

○殿上は、テンジヤウとよむなり。殿上のをのことは、殿上人の事なり。殿上又殿上人の事は、下巻一の巻に委くいふを引合せて心得べし。

躬恒主は前甲斐目と、古今の序にも見えて賤官、なるを、ことさらに殿上人の中に召上られし事の如く聞ゆるは、歌にいみじくすぐれたる名ある人なれば、さるやうのゆゑにてもあるべし。かざしさすとは、花などを折て頭にさすことなり。しかさゝん料に折たる花、又作りたる物などを、かざしといふは、駄言なり、髪にカゝさしの略かりたる言なるべし。又今さす事を、かざしてかざせかざすなり。

ど云フは用言なり。

六

かざせども老もかくれぬ此春ぞ花のおもてはふせつべらなる

○花などを頭にさせば、衰老の形も隠るゝさまにりてかざん老かくるやなどもいへど、今は我が衰老の見にくき

六

姿も隠れざれば、かくかざすも、かへりて花の面目を失ふべしとなり。おもてぶせは、俗に面目失ひといふに当れり。枕草子、「さかしらに柳の眉のひろごりて春のおもてをふする宿かな、続千載蘇維「はゝき木はおもてぶせやと思へばや近づくまゝにかくれゆくらんなど、猶あり。また、おもてをおこすといふ詞あり。それは俗に面目をほどこすといふにあたりにて、今のおもてぶ詞の反対なり。仲文集、堀川の中言うせさせ給へる比の贈答に、「あが仏かはくらべせよ極楽のおもておこしはわれのみぞせん。又特給日記などにも有り。

題しらず

よみ人しらず

一とせにかさなる春のあらばこそふたゝび花を見んとたのまめ

○重なる春のなきゆゑに、二度花を見ん事の頼まれねば、いと春の暮行ことをしきとなり。後拾遺上春「一とせにふたゝびもこぬはるなればいとなくけふは花をこそ見れ。(ハオ)

花のもとにて、かれこれほどもなくちることなど、申けるついでに。

○ちることなどは、散る事かななどいひけるといふ意なり。すべて歌にても詞書などにても云々の事と、又は、云々の事などといへる、事と云詞の下には、大かたかくざまにふくみたる意ある語勢なり。其所々にて、よく味ひ見るべきなり。

つらゆき

六

春くればさくてふ事をぬれ衣にきするばかりの花にぞ有ける

○ぬれぎぬとは、無名のたつ事なり。偽をぬれ衣といふ事、為家卿の抄に二説見えたれども、いかゞあらんと思はるゝうへに、契沖法師、縣居、大人なども、いかで無名のたつ事を、ぬれ衣とはいふにか、来歴(ハウ)

たしかならずなどいはれたれば、其いひ出たるよしは、今しり難き事なるべし。此詞をよみたる歌は、古今集にも此集にもをり／＼見えたれば、ことに例など引くまでもなく古今集の比よりの事とは見ゆるなり。かくて一首の意は、春のくれば花のさくといふ事は偽にて、さらになき事をいひて、人を欺アソビしかと思ふほどに、早く散たる事といひて、あまりに早く散たれば、咲しとも覚えぬといふ意ならんか。又は、さけども、さかぬといふ虚名ナカナをたてらるゝほどの、はかなきものなりといふ意ならんか。

春、花見に出たりけるを見つけて、ふみをつかはしたりける、その返事カヘリもなかりければ、あくるあした、きのふの返事返しと、こひにまうできたりければ、いひつかはしたりける(九七)

※つかね緒云、春、花見に出たりけるを見つけて、ある男の、文おこせたりけるを、かへりこともせざりければ、あくる朝、昨日のかへり事と、こひにおこせたりければ、いひつかはしたりける

○此詞書、主客の詞たがひて、いとまぎらはしければ、右の如くあらたむべしと、つかね緒に見えたり。

よみ人しらず

九

春霞たちながら見し花ゆゑにふみとめてけるあとのくやしき

○花をばたと立ながら見たるに、ふみとめたる跡ありと見つけられて悔しといふを、表にて、花を見るに心ひかれて、思はずも文をとどめおきて、今さらくやしといへるなり。春霞は、立といはん料なり。此歌、六帖また伊勢家集に、「春霞たちながら見し花なれどふみとめてける跡ぞうれしきとありて、家集にては、詞書もいたくかはれり。さていづれにしても、跡とは、ふみの事にかけていへるなり。文字を鳥の跡(九七)ともいへばなり。

をとこのもとより、たのめおこせて侍ければ

○たのめは、令頼（りょうりょう）にて、我にたのましむるなり。

100

春日さすふぢのうらはのうらどけて君し思はゞわれもたのまむ

○藤の末葉（つげの）のまでは、うらどけてといはん序なり。うらどけては、心解（こころと）てにて、（うらなし）（うら悲し）（うらな）（うら悲し）（うらな）（うら悲し）心うちとけ

てといはんが如し。君だに心底（こころ）とけて我を思ひ給はゞ、我もまた君がたのましめ給ふ如くに、たのみ侍らんとなり。契沖法師云、万葉十四、「春べさく藤のうらはのうらやすにさぬる夜ぞなきころをし思へば。

今の歌の、春日さす、少し心得がたし。万葉の歌にならずへば、春日（はる）さくにてやあらんといはれたる、さることなるべし。

題しらす

伊勢（いせ）

101

うくひすに身をあひかへばちるまでも我物にして花は見てまし

伊勢（いせ）

○我身と驚と、たがひに身をかへて、我が驚になりたらば、散るまでも花をば我がものなりとして見んものをとなり。重之集「もみぢ葉をおのが物とも見てしがな見るにいさむる人はなけれど。

元良のみこ、兼茂朝臣のむすめにすみ侍けるを、法皇のめして、かの院にさぶらひければ、えあふことも侍らざりければ、あくるとしの春、桜の枝にさして、かのさうしにさしおかせける

もとよしのみこ

○はじめの、元良のみこと云々事ひがことなり。除くべしと、つかねをに見えたり。法皇は寛平ノ法

皇にて、宇多ノ上皇の御ことなり。かの兼茂朝臣の女をめして、朱雀院か、又は亭子ノ院など、法皇の御所にさぶら^侍はせ給ふ故に、元良ノ親王はえ逢ひ給はざるなり。さうしは曹司にて、女の局をいふなり。

一〇三 花の色はむかしながらに見し人のこころのみこそうつろひにけれ

○桜花の色は、かくもとのまゝにてかはらぬに、我が逢見し人の心はかはりはてたる事よとなり。見し人とは、即チ兼茂ノ朝臣の女をさしてのたまへるなり。さて此御歌にて見れば、此桜は、則チ女の家の樹などにやあらん。女と共に去年は見給ひし花の如くも聞ゆればなり。

月のおもしろかりける夜あかき夜 ○花を見て桜の真

源さねあきら

一〇三 あたら夜の月と花とおなじくは心しれらん人に見せばやあはれイ (十一)

○物のあはれをもしらぬ我身のみ見んは、あたらしくをしき夜の月花を、とてもことに、物の心をもあはれをもしりてあらん人に見せまほしとなり。あはれしれらんとは、もとよりあはれをしりてあらんといふ事なり。心しれらんといふも同じ意にて、其物其事のうへを、あはれともをかしとも、其時其事につきて、しか思ふべき心をしりてあらんといふ意なり。家集、「色もかもまつ我宿の梅をこそ心しれらん人は見にこめ。物のおはれを知るといふは、まつすべて、あはれといふは、もと見るものきく物ふるゝ事に、心の感じて出る歎息（ナゲキ）の聲にて、今のあゝとはれとの重なりたる物にて、漢文に、嗚呼などあるもしを、あゝとよむも是なり。古言に、あな、又、あやなどいへるおも同じ。又、はれとも、はともいへるは、かのはれとは同じ。又後の言に、あつはれといふも、あはれと感ずる詞にて同じことなり。さて後の世には、あはれのは文字を音便にてわといへども、古へはすべてかやうのとこころをも、昔（十一）本の音のまゝに、はもじは異體などの如くとなへしなり。殊にこのあはれといふ言は、歎く声にて、あゝとはれとの重なりたるなれば、さらなり。さて又、あはれと見る、あはれときく、あはれと思ふなどいふたぐひは、いさゝか輕じたるいひさ

二四

都人きてもをらなにかはづなくあがたのゐどの山ぶきの花

○都人とは、治方^{ヘルカサ}ノ朝臣をさしていへるは論なし。しか都人としもいへるは、我が居る所を、縣の井戸といふ、其あがたは、古今集^下の詞書に、文屋ノ康秀が三河のぞうになりて、あがた見にはえ出たゝじやと、

条、小六条なども見えたり。
縣といふことは、古事記傳、廿九ノ卷の五十九より六十三葉までにつまびかりなり。井の事も、同書七ノ卷五十葉に委く見えたり。また正明の辛酉隨筆にもつまびかりに記されたり。されど、此所のしも用なければ、彼書どもを引出て委くは記さず。

橘公平女

あがたのゐどゝいふ家より、藤原治方につかはしける

まにて、これはあゝはれと感じて見聞思ふなり。又、あはれなりといふたぐひは、あゝはれと感ぜらるゝよしなり。又、あはれを見る、あはれを見ず、あはれにたへずなどいふ類は、すべて何事にまれ、あゝはれと感ぜらるゝさまを名づけて、あはれといふ物にしていへるにて、かならずあゝはれと感ずべき事にあたりては、その感ずべきことろはへをわきまへしりて感ずるを、あはれを感ぜらるゝと云なり。又、物をあはれがといふ言も、もあゝはれと感ずることなり。古今集ノ序に、霞をあはれびとあるなどをもてしるべし。又後の世には、あはれといふに哀の字を書て、ただ悲哀の意とのみ思ふめれど、あはれは悲哀にはかきらず。うれしきにも、おもしろきにも、たのしきにも、をかしきにも、すべてあゝはれと思はるゝは、皆あはれなり。さればあはれにをかしくとも、あはれにうれしくとも、つらねていへり。そは、をかしきにも、あゝはれと感じたるを、あはれにとはいへるなり。但し又、をかしきうれしきなどゝ、あはれとを對へていへることも多かるは、人の情のさまざまに感ずる中に、うれしき事おもしろきことなどには、感ずる事深からず。たゞ悲しき事うき事恋しきことなど、すべて心に思ふにかなはぬすぢには、感ずる事こよなく深きわざなるがゆゑに、しか深き方ととりわきて、あはれといへるなり。俗に悲哀をの(十二才)みいふも、その心ばへなり。たとへば、若菜ノ巻に、梅の花を、花のさかりにならべて見はやめといへることあるが如し。梅の花も花なれども、それにむかへても、桜をとり分て花といへり。さて又、物に感ずるとは、俗(ヨ)にはたゞよき事にのみいふめれども、是も然らず。字書に、感は動也といひて、心のうごく事なれば、よき事にまれあしきことまれ、心の動きて、あゝはれと思はるゝは皆あはれといふ詞によくあたれる文字なり。漢文に、感ニセシム鬼神ノヲ有て、古今集の真名序にも然りたるを、かな序には、おに神をもあはれと思はせとかれたるにても、あはれは物に感ずる事なるををしるべし。大かたあはれといふ言の本、又うつりて進むやうなと、上ノ件にて心得べし。かくて又、物のあはれといふも同じ事に、物といふ言は、言(イフ)を物いふ、かたるを物語、又ものまうて、物見、物いふなどいふたぐひの物にて、ひろくいふときに添ふことばなり。さて、人は何事にまれ感ずべき事にあたりて、感ずべき事をしるゝを、ものゝあはれある人は、感ずべき事には、おのずから感ぜではえあらぬわざなるに、さもありなれば、とも思ひわくかたなくて、かならず感ずべきことをしらねばぞかしなど、鈴屋ノ大人の、玉の小櫛にいはれたるが如く、人のいふ言にもあれ、するわざにもあれ、木草のうへ、鳥虫の声、空のけしき、野山のありさまなど、すべて感ずべき事にあたりては、其感ずべきことろはへをわきまへしりて、あゝはれと感ずるを、物(十二才)のあはれをしるとはいふなり。委くは、玉の小櫛を見てわきまふべし。

いひやれりける返事にといひ、伊勢物語四段に、昔あがたへ行人に、馬のはなむけせんとてとあるなどは、
縣のものと登りうつりて田舎といふが如くなれば、此所のも、今我が在る所の名の、あがたといふ田舎とにつきて、さきの
 人を都人とはいへるなるべし。二ノ句は、来ても居らなるといふを、折れかしといふにかけたるなり。
 上、春中巻に、「我宿の桜の色はうすけれど、三ノ句は、万葉八、「かはづなく神な備川にかけ見えて今やさくらん山吹の
 花のさかりは来てもをらなるとあるに同じ、
 花、古今下「かはづなくゐでの山吹散にけり花のさかりにあはましものをなどの如く、其所の物を冠らせ
 て、歌のにほひとせるなるべし。
今蛙の鳴て居る所の山吹の花といふにはあらじかはづの事今俗に、かはづともかへるともいふ物とも、また、別記に
 委く云十三フを見てわきまふべし。

すけのぶが母身まかりて後も、ときぐかの家に敦忠朝臣のまかりかよひけるに、桜の花のちりけるを
 りにまかりて、木のもとに侍ければ、家の人のいひ出しける

※つかね緒云、敦忠朝臣、助信が母の家に、身まかりて後も、時たまかり通ひけるを、
 桜の花の散けるをりにまかりて、木のもとに侍ければ、家の人のいひだしける。

○助信は、敦忠ノ卿の子なり。

よみ人しらず

一〇五 今よりは風にまかせんさくら花ちるこのもとに君とまりけり

○今よりは、花のちるをもさしもいとほじ。木の下に君はとまり給ふを見ればと云て、児の許にかけたる
 のみなるべし。師云、今よりはと云詞も、たとへの方へはかけずに、今日の実の上にのみいへるなり。風
 にまかせんといふも、花にたゝかはせて云にはあらず、
十四只はかなく何となくいひなしたる歌なり。風はた
 のみにならぬはかなき物なるを、其風に云々と云フなり。今ここに、風にちる桜の本に立とまり給へるにつ

きて、児許コシといふ事をいはん料にかくいへるなりといはれたり。かくさまによみたる歌は、一つの趣意を、大らかに云へるのみにて、一言々に、たとへの方にかけて、こまかによみたるものにはあらず。今の世の歌よみ、物学びの心には、とりしまりなく、たしかならぬやうに思ふべけれど、これ又いにしへのみやびたるよみさまの一つに、すべて古への歌には、全くたとへの方を以て実の意を裏によみ、其たとへの方の一言々に、こまやかにあたるもあり、此歌などの如く、こまかに、当らぬやうに、大らかによみたるもすくなくならず。又たとへの上の詞と、実の方の詞と、入交りたるもあり。万葉には、ことに此たとへと実との詞、入交りたる歌多きなり。なほ委くいはんには、種々のすがたあれども、さまでくたしくはいはず。なぞらへてさるべきなり。

かへし

あつたどの朝臣

三六

風にしも何かまかせんさくら花にはひあかぬにちるはうかりき(十四)

○風にまかせんといふを、助信ノ朝臣の母の事にとりなして、とがめて、いかで風にはまかせん、あかでちりしはうかりしものをとひて、かの母の身まかりしはうかりつるをといふ意なり。

桜川といふ所ありと聞て

○桜川は常陸国と、八雲御抄、井蛙抄等に見えたり。

筑波山より流出てみな川の末にて、桜の多き所なりと、玄旨法印の百人一首抄等にはあれども、國人は水上を桜川といひ、末をみな

の川と云ふといへるよし、或書には見えたり。

つらゆき

三七

常よりも春べになればさくら川波の花こそまなくよすらめ来にければ 六帖

○一首の意明らかかなり。波の花は、古今上春「谷風にとくる氷のひまごとにうち出る波や春の初花、また物

「波の花おきからさきてちりくめり水の春とは風やなすらんなどなは多かり。」(十五)

前裁に山吹ある所にて

兼輔朝臣

三

わがきたるひとへころもは山吹のやへの色にもおとらざりけり

○一首の意は、かくれたる所なけれど、恋の意などをしたにふくめられたるやうにも聞ゆ。もしは相しりたる女の、調じておくりたる衣などを着て、其女の家に行給へるをりなど、よまれたるにはあらか。われは二心なく、ひとへ心にてとひ来つれば、山吹のやへ重なれるにもおとらずといふ意のやうなり。契沖法師は、無位の時の歌なるべしといはれたれど、いかゞあらん。ひとへ衣とは、俗についたけ襦袢（ジユバン）といふほどの物なりと正明いへり。山吹といふ色は、表黄、裏青なり。おもて青、裏黄なるをば、うら山吹といふよし、花鳥餘情などにも見えたり。（十五ウ）

題しらず

在原元方

二

一とせにふたゝびさかぬ花なればうべちる事を人はいひけり

○一年の間に、二度とはさかず、春のみたゞ一度さく花なれば、散る事をゝしみて、人のとかくいふは、（コトワツ）理なる事よとなり。人はいひけりは、俗言に、彼はいふなどいはんが如く、其事をとがめいふ意なり。
上（ト）春に、「山守はいはどいはなん云々とあるに同じ。
（一とせ、ふたとせ、千とせなどのとはは年経（トシ）の約りたるにて、たゞ一年二年といふとは異なるよし、鈴屋ノ大人いはれたり、故レこゝなども

一年の間にといはんがとし、一年に
と心得てはいさゝかたがへるなり。

寛平御時、さくらの花の宴ありけるに、雨のふり侍ければ

○桜花の宴は花を賞（アヅカ）て、詩歌管絃の御遊などある事なり。源氏ノ物語の花ノ宴、榮花物語の月ノ宴などの類、皆同じ。宴ノ字は音にてエン（イハナ）とよむ事、此時代のならひなり。

二〇

春雨の花の枝よりながれもりてこばなほこそぬれめ香に、ほふべく六帖
なほこそぬれめ何かくれんぬれこそぬれめ何かくれん異

藤原敏行朝臣

○ながれこばは、流れ来ばなり。なほこそぬれめは、ひたものにぬれん此所にてはといふ意なり。なほの詞は、俗にひたものといふにあたれり。一首の意は、六帖などのと合せ見れば明らかなり。

いづみの国にまかりけるに、うみのつらにて

○海のつらは、海のほとりをいふなり。真名伊勢物語に、海頭うみづかと書き、帚木ノ巻に、ふかき山里、世はなれたる海づらなどに、はひかくれぬかしとあるなどにて心得べし。

よみ人不知十太

二一

春ふかきいろにもあるかな住のえの底もみどりにみゆる浜松

○松の色のうつれるゆゑに、住江の底も緑に見ゆるは、いとく深き松の色にもあるかなとなり。住吉の松をよめるなり。春深き色とは古今上春に、「ときはなる松の緑も春くれば今一しほの色まさりけりとあるなどの意にて、春は緑の色もことにそふ物なればなり。詞書には和泉国に云々と有て、歌には住吉とあるは、住江は摂津国ながら、和泉国への道なりと、抄にいへるが如し。
住のえは、今すみよしといふ所なる事は、いふもさなり。此住江をすみよしともいふは、万葉の歌に、多く住吉と書たる吉の字は、エの仮字に用ひたるなるを、ヨシと読誤たるよりの事なり。近江ノ国日枝（ヒエノ）神社を、日吉（ヨシ）と云ふも同じ。されどこはや、古くよりの事と見えたり。古今維上に、「すみよしと海人はつくともながるす人忘京おふといふなりとあるなどや。たしかに住よしとよみたるはらん。

女ども花見んと野べに出十七て

○女どもと、花見んとて云々とありしを、と文字を一つ写もらせるなるべし。趣意は女共と云々と
いふ事なればなり。

典侍因番
ないしのすけよるかの朝臣

二三

春くれば花見んと思ふ心こそ野べの霞とゝもに立けれ

花を見んてふ
立まじりけれ一本

○抄云、野べの霞とゝもに立ければ、花見んと思ふ心の、霞とゝもに立いそがるゝ心なるべし云々。心の
たつといふ事、今ノ人の心にては、少しいかゝなるやうに思はるれど、心の発起する事なれば、かくもい
はるゝなるべし。一本に野べの霞と立まじりけれとあるは、かへりてよろしくも思はれずと、師翁もいは
れたり。

あひしれりける人の、久しうとはざりければ、はなざかりにつかはしける

※つかね椿云、源清盛朝臣あひしれりけるを、久し
うとはざりければ、花ざかりにいひ通しける。

全七ウ
よみ人しらず

二三

我をこそとふにうからめ春がすみ花につけてもたちよらぬかな

○一首の意は、万葉十「我こそはにくゝもあらめわが宿の花橋を見にはこじとや、新古今上春」とめこかし
梅ざかりなる我宿をうときも人はをりにこそよれなどの類なり。春霞は、たつといはん料のみ。うからめ
は、俗言にイヤニアラーウケレといふ意なり。うき身といふも、賤(イヤシ)き身といはんが如く、姿形の見ぐるしき事にて、さて姿
形の見ぐるしきは厭(イト)はしく思ふ物なり其いとはしく思ふは、即チイヤに思ふ
なり。下維一に「いせの海のつりのうけなるさまなれど深き心はそこにしづめり」とある歌、同書なども見合せて心得べし。世をうき世といひ、恋の上にて
うき人などいふは、憂(ウ)く思ふ意にて、異なるやうなれども、うき世といふ時は、我がいとほしくイヤに思ふ世、うき人といふは、我を厭(イト)はし
てゆけば、一つ心におつるなり。又ニクイ、ニクラシイなどいふ意にもつかへり。意はイヤなり同じことなり。

悪

返し
源清蔭朝臣(千八百)

二四 立よらぬ春の霞をたのまれよ花のあたりと見ればなるらむ

○抄云、花のあたりと見れば、むげに立かくさんやとて、霞も立よらぬならん。さやうの心づかひ、霞を頼まれよとなり。霞も花は花としる心ありとの心をこめてよめるなるべしといへり。猶思ふに、我が深くも思はぬ心ならば、をり／＼通ひて、君が名のたつをもいとほざめど、深く思ふあまりに、君がためを思へば、かへりてしば／＼は立よらぬぞといふ意をも、ふくめたるならんか。
末句「見ればなるらん」とあるは、一首を霞の上にして、表の意は霞にてしたてた多からぬを、此集のころなどには、をり／＼ありていとみやびかなるいひさまなり、かゝる所なども、同じしたてなり。こは近世人などの歌には、をさ／＼りくなく

山桜をゝりて、おくり侍とて千八百

※つかね緒云、山桜をゝりて、人の許におくり侍とて、

○山の桜をといふ意なり。歌の二ノ句に尋ねてといへる、即チ山の花なる事を思はせたるにもあらんか。
さて、必ス山の花ならでも、歌に山桜とよむ事は梅などは大かたは人の家近きが多く、桜などは山なるが多ければなるべし。さてうつりては、山郭公などの類に、必しも山といふ詞に用はなしとも、軽くそへていふ詞ともなれるなり。近世の如く、花の色彩につきて、種々のこちたき名などつけて、其中の一種を山桜といふとは異なり。

伊勢

二五 君見よとたづねてをれる山桜ふりにし色と思はざらなむ

○君に見せんとて、わざ／＼と尋て折たる花なり。されば其こゝろざしを賞て、古くなりたる色なりと、思ひすてゝ給はるなとなり。

みやづかへしける女の、いそのかみといふ所にすみて、京の友だちのもとにつかはしける^(十九卷)

○禁中に仕へ奉たるが、今は石^{イソノカミ}上に引こもり居るなり。

よみ人しらず

二六

神さびてふりにしさとにすむ人は都にふ花をだに見ず

○神さびては、旧^{フル}くなりてといはんが如し。我は古くなりて、そのうへ古き事にいひならはせる布留^{フル}の里にすめば、くづをれ果て、都の事とては此時節にさきにはふ花をだにも見ずとなり。神さびは、万葉考別記に云、佐備^{サベ}、こは四くさばかりに転しいふめり。○一つは進む事を須佐備^{スササベ}、また佐備ともいへり。古事記に速須佐之男命^{ハヤスサノヲノミコト}云々、我勝^{アレカサノ}云而^ニ、於勝佐備^{カササベ}、離天照大御神之營田之阿^{ハヤタテノア}、埋^{ウシメ}其溝^{ミヅナ}云々。かの命かけ物に勝まし御心勢ひの進^スに、物を荒しなどし給ふを、勝佐備といひて、荒進^{ハヤシム}む方にいへり。○また卷七^{万葉也}に、朝露に咲酢左昆^{アサスササビ}たるつき草^(十九卷)のてふは、たゞ花の咲進むなり。卷十八に、翁佐備勢^{オホササベセ}卒てふは、老

の心進みせんといふにて、愁いかる時、心の和進^{ナグサム}わざするに同じ。心ずさみ、手ずさみなどいふ是なり。

卷四^{今ノ}に、雲だにも灼^{シム}したゞば、意進^{ナグサム}、見^ミつをらまし、直にあふまでにてふ、意進の字を思へ。神佐備といふも同じ。此卷^{卷ノ}に、神長柄^{カミサダカ}、神佐備世須登^{カミサベセスト}、芳野川^{ヨシノガハ}云々てふ、即天皇の神御心のすさみせさせ給ふよしなり。○二つには、只神ぶりしたる事をも神さびといふ。此卷に、耳為^{ミナシノ}之、青背山^{アヲサガヤマ}者^{カミサベ}云々、神佐備

立^{タツリ}。卷六^{今ノ}に、神さぶる伊駒高禰^{イコマタカネ}などの類多かり。卷二に、宇真人佐備而^{ウマヒトサベニテ}、卷九^{今ノ}に、遠等咩^{トホナメ}良何遠等咩^{ラナメトホナメ}佐備周^{サベシユ}などいふも、かのすさびより出て、物の有さまをいふことも成ぬ。是一転なり。

神儲^{カミサベ}と云ふもいへるは、^(二十卷)○三つには、かの神ぶりとするよりまた転じて、たゞ古びたる事とも成ぬ。卷十四^{今ノ}に、

に、いつのまも神佐備けるか、否具山^{カサヤマ}の、ほこ杉が末^{ワレ}、薛生^{コケムス}までに。卷十二^{今ノ}に、神佐夫等^{カミサフト}、いなにはあ

らず、卷七^ナに、石上、ふるのかみ杉、神さ備而、吾は更々、恋にあひにけりとさへあり。○四つにはうらさびといふ^{云々}と見えたり。うらさびの事は、此所の用な猶下^{維ノ一翁}に、いさゝかいへるをも引合せて見るべし。らねば末に委くいふべし

法師にならんの心ありける人、やまとにまかりて、ほど久しく侍てのち、あひしりて侍ける人のもとより、月ごろはいかにぞ、花はさきたりやといひて侍ければ

※つかね緒云、ある人の、大和にまかりて、ほど久しく侍けるに、あひ知て侍ける人の許より、月ごろはいかにぞ、花は咲たりやといひて侍ければ

○此詞書、ほふしにならんの心ありけるといふ詞は、此作者のみずからの家集に有しまゝなるべし。歌にあづからぬことなれば、此集にてはようなきいたづらごととなりと、つかね緒にいはれたり。

二七 みよし野の吉野の山山べにさけるのさくら花しら雲とのみ見あやまたれつゝえ六帖まかひつゝ

○花の咲たりなどいはんはおろか、たゞしら雲と見ゆとなり。古今上春「みよし野の山べにさける桜花雪かとのみぞあやまたれけるなどのたぐひなり」。

亭子院の歌合のうた

○拾芥抄云、亭子ノ院ハ寛平ノ法皇ノ御所^{云々}。所は七条西ノ洞院と、抄にいへり。宇多ノ天皇の下居させ給ひて、始は朱雀ノ院に大ましまし、又亭子ノ院を造らせまして、そこにおはしましたる故に、此帝の御事を亭子のみかど(二十一)も、亭子ノ院とのみも申(一七)奉れり。さて此歌合は、延喜十三年の事なりと、古今集打聴に見えたり。

二六

山ぎくらさきぬる時はつねよりも岑の白雲立まさりけり

○一首の意かくれたる所なし。古今^上「桜花さきにけらしもあし引の山のかひより見ゆるしらくも。

山の一本
山〇桜を見て

○山の桜を見てといふ意なり。のもしは後にうつしおとせるにてもあるべし。やがて一本には、
山のとあり。

貫之

二九

白雲と見えつるものをさくら花けふはちるとや色ことになる

○古今^下「春霞たなびく山のさくら花うつろはんとやいろかはりゆく。^(二十一)今の色ことになるといへる、大かた似たり。

だいしらず

よみ人しらず

三〇

我宿のかげともたのむ藤のはな立よりくともなみにをらるな
そ 結千載

○抄云、かげと頼むは、身をかくしおく所と頼む心なり。なみには、なみなみにはをらるゝなといふ心をそへて、波は立よりくともをらるゝなとなりといへり。此歌、かげとぞたのむとは藤原氏をたのむよしなどを、ふくめたるにもあらんかなども思ひつれど、又よく思ふに、さまでふかき心をこめたるにもあらざるべし。六帖に「われのみやかげとはたのむ白波もたえず立よるきしの姫松。椎本ノ巻に「立よらん陰とたのみししひがもとむなしきとこになりにける哉などの類なるべし。なほ此歌は、伊勢家集に出て、海

づらの家に、藤花さきたり」と詞書あり。かくては屏風などの絵をよまれたるなるべし。さてはいよ／＼

よく心得らるゝなり。我宿の云々とは、此海づらなる家の主の意になつていへるなり。なみにをらるなとは、花のあたりに波の立来るさまの、あや

ふげに見ゆれば、打見たるまゝをはかなくいへるなるべし。拾遺「手もふれでをしむかひなく藤の花底にうつれば波ぞをりけるとあるなどをも思ふべし。抄に、なみ／＼にはをらるゝなど云心をそへたるなりといへるは、いかゞなり。

三 花さかりまだも過ぬに吉野川かげにうつろふきしの山ぶき

○抄云、盛過てこそうつろふとはいふに、はや水の影に山吹のうつろふとなりとある、然るべし。水に影の映ると、花の散移落と、詞同じきによりてかくはいへるなり。かくさまに、いさゝかなる詞のよせなどを以て、一首のしたてとする事、古へ人の風雅(ミヤビ)には常に多き事なり。

これはたよく心得べきことなりかし。(二十二ウ)

人の心たのみがたくなりければ、山ぶきのちりさしたるを、これ○見よとて遣しけるを一本

○散さしたるとは、ちりかゝりて残あるをいへるなり。六帖に「いとまだき過ぬる秋のかたみには枝に紅葉ぞ散さしにける、ともあり。

三 しのびかねなきて蛙のをしむをもしらずうつろふ山吹の花

○よそにうつろふ人をゝしみて、え忍びあへず、我が声たてゝなくともしらで、なほたのみなくなりゆく事よとなり。恋ノ歌なり。

やよひばかり、の花のさかりに、道まかりけるに

二三

をりつればたぶさにけがるたてながらみよの仏に花たてまつる

○やよひばかりの、の文字は例の誤なるべし。すべて詞書にかゝるふりにいへる、やよひばかり、ふみ月ばかり(二十三オ)などいへるは、花のさかりに云々、そはやよひ比の事なりといはんが如く、いつのころといふ事を、かるくいひおくのみなれば、やよひばかり」とよみ切て、花の云々と心得べし。さるゆゑに、の文字を入れて、下へつゞくる所とは異なり。

ついでに云、一年十二月の名を、やよひ、きさらぎなどいふを、やよひは弥生(イナオヒ)なり、きさらぎは衣更着(キヌサラギ)なりなどいふ説の中には、然るべく聞ゆるもあれど、それはた本末たがひなとして、をさなきいひざまなり。この月の号(ナ)といふものは、深きゆゑよしある事と見えたり。鈴屋ノ大人も、思ひよりたる事もあれど、いまだよくも思ひさだめされば、いひがたしといはれたり。縣居ノ大人の説もあれど、猶いかゞあらんと思はるれば、こゝには挙げず。おのれもいさゝか考へたる事もあれど、猶いかゞあらんおぼつなければ、今はもだしつ。然れども、弥生衣更着などの説は、きはめてひがごととなれば、こゝに弥生計とかきたる本も有。また他の月の名も、右のさまにいひなれば、一わたりおどろかしおくなり。

(二十三ウ)
僧正遍昭

○花を折れば、手にふれて汚るゆゑに、立てあるまゝにて、三世諸仏に奉るなりと云意なり。まことに、紅葉の錦神のまに／＼などの如く、途中なれば、折取て物せん便あしきゆゑに、立ながらなるを、手ぶさに汚るといひなし、さて常にをり取たる花は、本尊(ホソン)やうの仏に供する事なるを、今は、たてながらといふによりて、三世の仏にと広くいはれたるなるべし。たてながらは、ふと思へば、たちながらとあるべきやうなれども、然らず。たてながらは、立(タテ)てあるまゝにてといふ意なればなり。又たてながら見よと云かけたるにはあらず。思ひあやまるべからず。此歌、上下の句の間に、さるゆゑにといふ事を加へて見れば、ひとわたりよく心得らるゝなり。かくて或説(二十四オ)に、神楽歌に、「みづ垣の神の御代よりさゝの葉をたぶさにとりてあそびけらしもとあるを、此歌の手ぶさの事に引たるは誤なり。神楽歌の手ぶさは、手草をうたひ誤たるなれば、こゝに引はあたらぬことなり。手草は、古語拾遺、また古事記、磐屋戸の段に、竹

葉を手草とすと云證あればなりと、師翁いはれたり。

題しらず

よみ人しらず

三四

みな底の色さへ深き松がえに千とせをかねてさける藤なみ

○水にうつる緑の色も又深き松枝になり、松に掛れる藤なれば、千とせをかねてとはいへるなり。此歌も水辺の藤をよめるは論なくして、猶千とせをかねてと云わたりなどは、いさゝかやうありげに聞ゆ。もしは上の、「立よりくとも波にをらるななど」同じく、屏風の絵などをよみたるにはあらじかとも思へど、より所なければさだめがたし。藤を、ふぢなみともいふは、花の垂(タリ)して藤(ナジ)く物なれば、なみはなびきの約まりたるなりと、縣居ノ六人いはれたり。

やよひの下の十日ばかりに、三条右大臣、兼輔朝臣の家にまかりわたりて侍けるに、藤の花さけるやり水のほとりにて、かれこれおほみきたうべけるついでに

○此詞書、三条右大臣の五文字は除くべきよし、つかね緒に見えたり。作者のみづから
の名なればなり。やり水は、庭などにことにつくりて、こなたかなたへ流しやり、或は便よき所にては、川の水をせき入て物しなどもしたる水にて、今世にいはゆる泉水なり。ササキ帚木巻なる、紀伊守の中川の家のさまなどにてよく心得らるゝなり。やとり水と書たる本も
あれど、そは誤なり。大みきは、大御酒なり。オホミ酒の事を御酒といふは、もとは大嘗会の白酒黒酒などの神に奉るをいふより、天皇の御をのみ申す事なるべきを、転りては、やむごとなき人の前などにては、其人を敬ひて、おほみきともいふ事にはなりたるなるべし。たうべといふ詞の事は、
上、春上巻に云り。

三条右大臣

三三

かぎりなき名におふちの花なればそこひもしらぬ色の深さか。上 眞

○かぎりなき名におふ藤のとは、藤を測によせて、藤は、古へ清（スミ）で、測の如く唱へつらんよしは縣居ノ大人もいはれたり、げにさもあるべし。此次下に眞之主の、「さをさせど深さもしらぬふちなれど、

よまれたるは、全く測にいひなされたるなり。猶他の歌にも比たぐひ多し。又、今も東海近三河國なる藤川駅をも、其所の人も、そのわたりにても、又加茂ノ郡などの人も皆ちをすみて、測の如く唱ふるなり、但し然らずとも清測かはして、和泉川いつ見きとてかなどの如くいひかくるも、常の事にはあるなり、

測といふ名に負てある花なれば、其色もかぎりもなく、底ひもしられぬ深き事かなとなり。さて下句そこ二十五ツ

ひもしらぬ云々は、あるじの御ふるまひ、奥ゆかしき事どもにもあるかなといふ意をかね給ひ、それを底ひ

も云々といはんとて、上の句はかぎりなき云々とはおき給へるなるべし。名におふとは、其名に負持つ事に

て、俗言にいはと、某ト名ニ付テアル、其名ノ通ノといふ意なり。淵底ひなどは、やり水のよせなり。末

句のか文字は、かなの意なり。此歌、抄には兼輔も此家の藤原にて、冬嗣公の曾孫、良門の孫、左中将利

基の子なれば、かぎりなき名におふとよみしなりといへれど、そはいかとなる説にて、師も、藤家の事に

はかゝはるまじき歌なりといはれたり。

三三

色ふかくにほひしことは藤なみの立もかへらで君とまれとか

（二十六）
兼輔朝臣
す家集

○立かへりもせで、いつまでもかくおはせとて、藤の花も色深くはにほひしにやあらん。さやうに思はる

となり。藤なみを波にいひかけて、立もかへらずなど縁の詞なり。此末句のかは、一匹うたがひて、又おしはかり定むる意なり、玉緒にいはゆる切るとかにて、上の歌の、かなの

意なるとは
眞なり。

つらゆき

三

さをさせどふかさもしらぬふちなれば色をば人もしらじとぞ思ふ

○主人兼輔ノ朝臣の、たちもかへらで云々にこたへて、かくかりそめに来ても、すべて／＼いとねんごろにて、おくゆかしき事どもなれば、実に立もかへらで長く居よと思ひ給ふにや、又は勉てあへしらひ給ふにや、其心中をば、誰もしり侍らじと思はるとなるべし。さて此貫之主は、右大臣ともろ共に訪はれたるか。又は兼輔朝臣の方に居られたるか、そは知ざれども、此次の「あさばらけ下ゆく水は云々も、此歌も、ともに賢と主とのあはひの俗にいふ取持の意にてよまれたるやうに聞ゆ。又思ふに、此主は兼輔ノ卿に名つきおくりて物せられたる事、下雑にも見えなれば、ことにしたしかるべき事は論もなければ、今も賢右大臣をもてはやさんためなどに來られて、此主も主ノ卿兼輔と同じく、「かぎりなき云々にこたへて、げにそこひもしらぬとのたまふはさる事にて、主の心は、たどりもしられぬ深き心なれば、そのねんごろに思はるゝ程をば、誰にてもしり給はじと思ふといふにてもあるべし。

ことふえなどしてあそび、ものがたりなどし侍けるほどに、夜ふけにければ、まかりとまりて、またのあしたに

○此詞書以下の三首も、上と同時の事にてつゞけり。まかりとまりてのまかりは、たゞ添はりたる詞にて意はなし。今世の俗言に、マカリナラスなどいふに似たるつかひざまにて、少しいかゞはし。

三条右大臣

三六

きのふ見し花のかほとて今朝見れば寝てこそさらに色まさりけれ

○藤花を、女の容儀などの如くとりなして、一夜寝て馴つれば、又今朝はことさらに色のまさりて見ゆる

事よとなり。紫色は、まことに朝はまさりて見ゆるものにもあり。又女などの、相馴ては容儀の見まさりするやうに思はるゝも人情の常なり。猶人の姿の朝まさるよしは、夕顔巻に、源氏君の御事を日さし出るほどに出給ふあさけの御すがたは、(二十七ウ)げに人のめで聞えんもことわりなる御さまなり、なども見えたり。花のかはは、興風集「うすくこきいるはまがへど花といへばひとつかほにも見えわたるかな、若紫巻「おく山の松のとほそをまれにあげてまだ見ぬ花の顔を見る哉など猶あり。

兼輔朝臣

三元 一夜のみねてしかへらば藤の花心とけたるいろ見せんやを見せんや 師範集

○寝てこそさらに云々といふをうけて、いな、たと一夜ばかり寝て、帰らんとしたまふやうなる心浅さにては、花も心とけたる色を見すべきや、いかでか心とけたる色をば見せ侍らんと、人の好色の如くによりなして、猶右大臣をとどめらるゝおもふきなり。

(二十八ウ)
つらゆき

二三 朝ほらけ下ゆく水はあさけれど深くぞ花の色は見えける

○げにあるじのゝたまふ如く、一夜ばかり宿りてかへり給ふは、深き御心にはあらねど、主人のもてなしは、浅からぬ御心しらびと見ゆるなりといふ意と聞ゆ。下行水は、歌の表にては、やり水の事にて、裏の意にては、右大臣のかへりゆき給ふ心をいふなり。

だいしらず

よみ人しらず

三

鶯の糸によるてふ玉柳ふきなみだりそはるのやまかぜ

○催馬楽に、「青柳を片糸によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花がさと有て、柳は鶯の糸によるといふ物なれば、吹乱らす事莫かれと、風に令するなり。みだりは、令乱といはんが如し。玉柳は、催馬楽高砂の歌に「高さこの、さいさこの、をのへにたてる、白玉椿、玉柳(二十八ツ)なども見えたり。たゞ柳を賞ていへるなり。

さくらの花のちるを見て

○此詞書は、桜の花の散ける木の下にて、などあらまほしきこちす。歌の意は散たる後の事なればなり。

みつね

三

いつのまに散はてぬらんにげん 六結さくらばなおもかげにのみいろを見せつゝ

○抄云、さかりの時の俤ばかり残して、いつのまにかく散はてしぞとなりといへり。実に咲たりと思ふはどもなく、散はてたれば、実とも思はれずといふなるべし。結古今春上に、為家卿の、「よしさらばちる迄は見じ山桜花のさかりをおもかげにしてとあるは、此歌により給へるなるべし。

上此に、「春くれればさくてふ事をぬれ衣にきするばかりの花にぞ有けるとあるに、大かた似たるおもぶき(二十九オ)なり。さて六帖に、「さかざらんものとはなしに桜ばなおもかげにのみまだき見ゆらん、新勅撰春に、「お

もかげに花のすがたを先だてゝいくへこえ来ぬ峰の白雲とあるなどは、いまだ花をば見ざるを、心の思ひなしにて、花を見るこゝちのして、面影に見ゆる意なり。此歌のは、散たる後になりて、なほ夢まぼろしなどの如く、それかとばかりほのかに覚ゆる心なり。おもかげは、俗に、タハ目ニ見ユルと云フ心ばへなり。 同じ詞ながら、此歌にいへる

は、ほのかにはかなき方にいへるにて、六帖、新勅撰遺ひざまなどのとは違へり。思ひまがふべからず。

あつみのみこの、花見侍ける所にて

○敦実親王は、宇多ノ天皇の皇子におはせり。

(二十九)
源中宣朝臣

二三

ちることのうきも忘れてあはれてふことを桜にやどしつるかな

○花の盛にうるはしきを見ては、散る事の憂きをば忘て、あゝはれ見事なことやといふ、あゝはれといふ感心の詞を、花にかけたることかなとなり。あはれは、花を賞るゆゑに、あゝはれと長大息ことなり。契沖法師云、桜にやどすとは、花の上に置く事なり。

二四

さくら色にきたる衣の深ければ春日の一本すぐる月日もをしけくもなし

桜のちるを見て

よみ人しらず

○古今春に、「桜色に衣はふかく深フカクて着キん花の散なん後のかたみにとある、その桜色に深くそめて着つれば、散たらん後も、花の記念かみんはあるゆゑに、月日の過るも、さしもをしからずとなり。さて、古今の歌の桜色を、後世の註に桜サクラ重カサネの事とて、表白、裏赤花といへるは違(三十)へりと、縣居ノ大人いはれ、此桜色といへるは、たゞ桜の花の色にといへるなるべし。桜色とてさだまれる染色をいへるにはあらじと、横井ノ千秋翁もいはれたり。されば此歌なるも、古今同じく、桜の花の色といふ事なるべし。

やよひにうるふ月あるとし、つかさめしのころ、申文にそへて、左大臣家につかはしける

○公事根源に、京官除目ツカサメシノジモツ」是は三月三日より先に行はるべき事なれど云々、京にある諸司を任らる

ゝ故に、京官とは申なり云々。縣召アガタメシは、外官をむねと任せらるゝなり。外官とは、諸国の官にて侍

る云々。司召は春の事、縣召は秋なり。マツシメ、猶末に縣召の所に委く云フ。申文は、我がなりたき官を望み申訴状なりなど見えたり。(三十ウ)

貫之

三三

あまりさへありて行べき年だにも春にかならずあふしもがな

○当春、三月に潤ツルのあるは、君の御恵ミタゲに餘分アツクのあるやうなるものなり。せめてはかく餘分のある年になり共、御恵の春に、必ツ遇アはまほしき事かなとなり。後漢書ノ張純ガ傳云、閏ニ、歳之餘也云々。猶何くれに見えたり。

かへし

左大臣

三三

つねよりものどけかるべき春日すら六帖なれば光に人のあはざらめやは

○一首の意は明らかなり。上ノ句は、三月に閏のある事をいへるのみにて、御恵の方のたとへにはかゝはらず。下ノ句にいたりて、御恵の事をたとへてのたまへるなり。此類の歌多くある事、上にいへるがごとし。初二ノ句は、閏月のあるゆゑ

に、例の年よりのどけしとなり。拾遺(三十一ウ)春閏三月侍けるつごもりに、恒ト「つねよりものどけかりつる春なれどけふのくるゝはをしくぞありける。」

つねにまうできかよひける所に、さはる事侍て、ひさしくまできあはずして、年かへりにけり。あくる

春、やよひのつごもりにつかはしける

※つかね積云、つねにまうで来あひける所に、紀ノ貫之さはること有て、久しくまで
※あはらずして、年かへりにけり、あくる春、やよひのつごもりにつかはしける。

○まうでき、又まできともに、物まうでなどの参るといふことなり。
まうでに同じく まうでかよひは、参り来かよひ、まできあはず
は、参り来不達なり。こは、までと云方正しき詞な

るを、音便にて、まうでとはいふなり、此果のころのならひにて、尊卑上下にかゝはらず、こなたへ来かへるとは、一年のくれて、
る事をばまうで、かなたへ行くことをはまかるといふ事となりたる事、上春中春にもいへるがごとし。

翌年アノトシの春になりたるなり。春より春にかへりたる意なり。つごもりは、月隠ツギモリにて、すべては一月の

末の廿五六日（三十一）ころより末にて、月ノ光のなき比を広くいふ事鈴屋ノ大人、其語考になれども、此詞書にい

へるは全く晦日ミヅカの事なり。歌にて其よししられたり。

藤原雅正

二 君とずて年けりはくれ其之集にきたちかへり春さへけふになりけるかな

○常にしば／＼来通ひ給ひたるを、去年よりは来給はねど、一向に対面もせずして、今年の春になり、その春もまたむなしくて、今日一日になりたる事かな。さて／＼心ならず遠々しき事よとなり。

三 ともにこそ花をも見めとまつ人の来ぬ物ゆゑにをしき春かな

○君と共に花をも見んと待たるに、その君のかやうに来給はねば、何のたのしみもなければ、春の暮行くも、さしもをしきはあるまじき事（三十二）なるを、なほ春のくるゝはをしく思はるゝ事かなとなり。来ぬものゆゑには、俗言に、来モセヌモノヂヤニといふ意なり。古今上春「待人もこぬものゆゑに鶯の鳴つる花をよりてけるかな。

三

君にだにとはれでふれば藤の花たそかれ時うき時をしも 六帖もしらずぞ有ける

返し

つらゆき

○これまでしば／＼出会たる君にさへも、訪はれずして日ごろをつら経れば、鬱々ウツクとのみ屈し居て、時剋のうつるをもしらずに過す事よとなり。たそがれ時もと云て、朝夕の時剋のうつる事にいひ、さて時剋のうつるをもわきまへずと云て、月日の過て、暮春に成たることをもこめたるなり。抄に、白氏文集に、紫藤花ノ下漸黄昏とある句の意にて、たそかれに藤をよみ合されしなるべしとあるぞよろしき。たそ(三十二ウ)か
れとは、夕方のほの
ぐらき時は、難(タレ)そ彼(カレ)ぞといふ事の見わき難き
よりいふ詞なり。後世に、か文字を濁ても唱ふるは非なり。されど、家集には、「君にだにゆかでへぬれば藤衣たれがうときもしらずぞ有けるとあるによりて見れば、喪中の事と聞ゆ。また此集六帖などのさまにては、二ノ句の詞、雅正ノ朝臣も、とひがたき筋ありて、心ならずも訪はれざるやうに聞え、次の歌の意も、たとならぬさまに聞ゆれば、もしは詞書に、さはる事侍てとのみ有て、たしかに其ことゝかゝれざるは、公に對ひ奉ての畏かしこまりにても有けんかし。

二

やへむぐら心のうちしげ 六帖にふかければ花見にゆかん出立もせず

○葍ハナの、門などをとちたるが如く、心の中にさはる事のしげくあれば、例たとの春の如く、君の許に行べき心もせずとなり。此歌、上の「ともにこそ花をも見めと云々」と云にこたへられたるなり。やへ葍(やへ)葍などのやへは、
弥重(イサ)へ三十三の意
にて、繁ぐ重なる事なり。八重とも書くは、八は例の借字にて、八ノ字の意にあづかるにはあらず。詞花春に、「いにしへの奈良の京のやへ桜けふ九重に、
ほひぬるかなといへる類は、八重九重とかけ合せるにはあれど、そも詞のうへのかけ合のみにて、意は猶弥重の意なり。思ひまがふべからず。

題不知

よみ人しらず

二四

をしめども春のかぎりのけふのまた夕暮日の伊勢物語にさへなりにけるかな

○三月晦日の夕方の歌なり。意は明らかなり。

二五

ゆくさきをゝしみし春のあすよりは来にし方にもなりぬべきかな

みつね

○春の暮て行くを、惜アツき／＼と思て居るうちに、春は既に暮クレハ竟たれば、明日よりは旧来キへ戻りて、此今までをしみたる春の来たる方になるべき事かなとなり。春の来りたる方とは、秋冬などの事にはあれども、それを道路などの如くにいひなしたるなり。今春の尾を過離ワれなば、明日よりは又来ん春の、首の方に行向ふならんといふやうの意なり。二ノ句、春のの文字は、用語ののにて、俗言に、ガといふのなり。

此歌、させるかたきふしはなけれども、ふと心得あやまるときは、さらに心得がたき歌にて、さて解釈(トカ)んとするにも、いさゝかいひとり難きまゝに、かくかやかくやと、くだ／＼しくはいへるなり。又此歌の意、今日までは、我が暮しゆく前(サキ)にありて、をしみし春の、明日よりは、我身の後(アト)にあらんといふやうにも聞ゆれども、なほ然にはあらず。

やよひのつごもり

○此詞書は、に文字を落せるにはあらぬか。つごもりにとありげなる所なり。

貫之

二六

ゆくさきになりもやするとたのみしを春のかぎりはけふにぞ有ける(三十四才)

○いまだ春ならぬ時は、かく暮し行く先の、春になる事もやと頼しを、そのたのみたる春は来ても、させる心ゆく事もなくて、春の日数の限は、今日にてある事よとなり。かくて、此歌詞の表の、なるといふ言

は、行先^{イフ}に変わる、何時^{イツ}に更^ナるなど云、其時に移^ナるをいふ詞にて、さて裏の意にては、身の昇進する事を、成出^ナとも、なるとのみも云、その詞にきかせて、此春などは、出身^{ウツリカナル}する事もやと頼しものを、其時節の春は、けふ限にてある事よと、なげく意をかけたるなるべし。二三ノ句のさまなど、必^ナふくめたる趣意あるべく思はる。三月は司召ある月なればなり。

一四

花しあらば何かは春のをしからんくるともけふはなげかざらまし
よみ人しらず
(三十四ウ)

○花しあらばといふ句、下ノ句までへかけて心得べし。一首の意は明らかなり。曾丹集「花の香の枝にしとまるものならばくるゝ春をもをしまざらまし、後拾遺^下「桜花まだきな散そ何により春をば人のをしむとかしるなどあるをも、引合せて見るべし。

みつね

一五

くれて又あすとだになき春の日を花の蔭にてけふはくらさん

○春の日を、春の日なるものといふ意なり。花のかげにての花は、桜にはかきらず。広く春さく花をいふなるべし。
古今集の春部に、桜の歌のかきりは、さくらとよみ、又歌に花とのみよめるは、詞書に桜とことわれり。さらで、たゞ花とよみたるは、広く百花をよめるなりと、契沖阿闍梨も、縣房ノ大人もいはれたり。然れば此集なるをも、かれになぞらへてしるべきなり。

三月つごもりの日、ひさしうまうでこぬよいひて侍るふみのおくに、書つけ侍ける
(三十五ウ)

※つかね緒云、やよひのつごもりの日、人の許に、久しう
まうでこぬよいひやりける文のおくに、書つけ侍ける

○もうでこぬよしは、久しく来給はぬといふ事なり。

貫ゆき

一哭

又もこん時ぞと思へどたのまれぬ我身にしあればをしき春かな

○けふ暮るゝ春も、又来年は来るべき事ぞとは思へども、我身の存命あらん事の頼まれねば、今日暮行事の、をしく思はるゝ事かなとなり。猶思ふに、初二ノ句に、春ならても、又も来給ふべき君ぞとは思へどもといふ意をふくめたるにもあるべし。かく見る時は、上二句は、たとへの方と表裏にかけていひ、三ノ句以下は、表裏^{初二}の意を一つに受ていへるなり。

貫之、かくておなじとしになん身まかりにける。^(三十五ウ)

○此左註は、撰者たちのはじめより書加へられたることか、又は後人の書加へたるにか、いづれにしてもさまたげなし。さて貫之主は、天慶九年卒と、作者部類に見えたり。

後撰和歌集卷第三^(三十六ウ)新抄

後撰和歌集新抄全十冊

同別記 二冊

文化十一年甲戌暮秋發行

京都 風月庄左衛門
東都 前川六左衛門

書
肆
浪華 森 太助

尾張 片野 東四郎